



Title	アルフレート・ヴェーバーの文化社会学について
Author(s)	江口, 豊
Description	研究ノート
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 57, 55-74
Issue Date	2009-11-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40059
Type	departmental bulletin paper
File Information	MSC57-004.pdf



アルフレート・ヴェーバーの文化社会学について

江 口 豊

0 序

今日の社会学の基盤を据え、圧倒的な影響力をもつ一人としてマックス・ヴェーバー (Max Weber 1864-1920) の名前を挙げることを否定する研究者はほとんどいない。しかし、同じ社会学者であり、社会や政治の実務にも多彩な活動を展開した4歳年下の弟のアルフレート・ヴェーバー (Alfred Weber 1868-1958) はあまり顧みられることがない。その母国ドイツでは、兄マックスの死を挟んで1958年に没するまで、政治・経済・社会学から文化社会学にまたがった広範な分野で業績を挙げたこと、また、政治・社会活動を通じて積極的に発言、行動する「物言う」大学人・知識人であったこと、とりわけナチス政権への明解な拒絶などから、文字通り時代の寵児となった時期もあったようである。また、知識社会学で著名なカール・マンハイムが、ハイデルベルク大学で教授資格請求論文 (Habilitation) を執筆した際に指導にあたった例が示すように、アルフレート・ヴェーバーは多くの研究者・インテリ層との接点がある。¹ところが、逆に文化社会学の領域で、直接的な後継者と目される研究者が続くことはなく、兄マックスの文章とは別種の難解さのためもあり、² その没後、ドイツ社会学が経験主義的、実証主義的な色合いの濃いとされるアメリカ社会学の強い影響下に入っていくなかで、徐々にしかほとんど忘れられていった。

そうした中で、フランスのリヨン大学の歴史研究者エーバーハート・デム (Eberhard Demm) に代表されるアルフレート・ヴェーバー研究者が中心となって、1980年代以降その業績について調査・考察が重ねられてきた。そうした動きが結実するかたちで、ドイツでも辛うじて出資者が見いだされ、³ 1997年からその10巻本の著作集 (Alfred Weber-Gesamtausgabe 1997-2003)

1 Molt (2002)のタイトルが象徴的に示している。

2 教え子の一人エーリヒ・フロムの回想文にも「ときどき奇妙な、混乱した言葉遣いで話した」と記されている。Demm (2000b)、S. 126. 参照。また、アルフレートのドイツ語の文章を読むと思考の「勢い」は感じるが、破格構文や同格句の繰り返しなど難解な表現が目につく。

3 アルフレート・ヴェーバーの指導の下で1935年に哲学博士論文をとりまとめた Walter Witzmann という企業経営者兼地方政治家が篤志家となったことを、全集第1巻「よせることば」のなかでドイツ自民党の女性政治家ヒルデガルト・ハム＝ブリュヒャーが指摘している。

が刊行されるに至った。

拙稿であえてこの人物を取り上げる目的は、さまざまな知識人・研究者との関係を通じて、ハイデルベルクの20世紀初頭から戦間期を経て第二次大戦後に至る時代のアカデミズム、とくに人文社会科学をとりまく情勢や雰囲気的一端を日本語で紹介することである。また、夙に指摘されているカール・マンハイムを代表とする知識社会学など、その後の学問的潮流への影響の可能性を将来的に確認するための背景点描とすることも、アルフレート・ヴェーバーについて書こうとする追加要因である。

1 アルフレート・ヴェーバーの略歴

アルフレート・ヴェーバーは、Karl David Alfred Weber としてドイツ東部の町エアフルトで、父マクシミリアン・ヴェーバー（兄マックスと同名のため、関係文献では Max Weber sen. と表記することが多い）と母ヘレーネの次男として1868年に生まれている。しかし、生後6ヶ月で父がベルリン市参事に招聘されたため、当時はベルリン市外であったシャルロッテンブルクに転居している。秀才の誉れが高かった兄マックスとは違い、アルフレートは、9年制の中等教育機関ギムナジウムで二度落第を経験している。これは、それまでいわば自然児として気ままに振る舞っていた彼にとっては「かつての遊び仲間から切り離された」⁴りした辛い経験であった反面、「自分自身について熟考する」⁵ようになったきっかけと記している。落第の経験から、学校での課題にもそつなく対応できるようになると、モムゼンやクルティウスなどの歴史書やニーチェに夢中になったり、詩作や劇作を試みたりして、こうした傾向が後にボン大学で最初芸術史や考古学を専攻するにいたった。この分野の修学は1年間で終わりを告げ、アルフレートはテュービンゲン大学在籍を経由して最終的にベルリン大学で法律と当時の流行の学問であった経済学とを専攻する。⁶ 1897年グスタフ・シュモラー教授の下で博士学位論文を、続けて1899年には教授資格請求論文（Habilitation）を家内工業に関するテーマでまとめている。⁷ もちろん、ドイツでは法律学生が修了を目指す国家試験（第一次と第二次の二回あり）も同時期に済ませている。

1899年からベルリン大学でいわゆる私講師（Privatdozent）として教えた後、1904年アルフレート・ヴェーバーは、当時チェコ語とドイツ語とで教育を行う組織が分離していたプラハ大学に正教授として招聘された。1907年にハイデルベルク大学に招聘されるまでの彼の講義は、「もっとも人気ある学者で…カロリーヌムという大学最大の講堂でも学生がほとんど収まりき

4 Demm (2000b) S. 15. 参照。

5 同上。

6 Demm (2000a) S. 30. 参照。

7 同上。

れないほどだった。とくにマックス・ブロートやフランツ・カフカを中心にしたユダヤ系ドイツ知識人がアルフレートの講義に押し寄せた。」⁸ という話が伝わっている。後にやや詳しく触れるが、この時代にチェコ人の同僚としてとくに親しくなったのが後の初代チェコスロバキア大統領トマーシュ・マサリク (Tomáš Masaryk) であった。

そのマサリクと協調しながらの政治改革（オーストリア＝ハンガリー帝国内におけるチェコ人の同権運動など）を中断せざるをえないという不本意なかたちで、アルフレートは1907年にハイデルベルク大学からの経済学教授招聘を逡巡しながら受け入れることになる。

この後、二度の中断期間（第一次世界大戦の4年半とナチス政権時代の12年間）はあるものの、1958年の没年に至るまでアルフレート・ヴェーバーは数々の教え子を育てながら、政治的社会的に行動しつつ、自らの研究を継続した。

2 アルフレート・ヴェーバーをめぐる人々

冒頭の略歴で紹介したが、マックスとアルフレートの父は政治家でプロイセン帝国議會議員も務めていた。また母はユグノーの系譜にたつ熱心なカルバン派信徒であり、社会奉仕に強い関心を持ち、それを実践し続けた人物であった。こうした環境で、ヴェーバー家には、当時のベルリンの政界、学界などの人物が出入りしていたらしい。まず、父のマックスが国民リベラル系ということもあり、国民自由党のルードルフ・フォン・ベニングセンなどの政治家や、母との政治的立場の近さが指摘されているフリードリッヒ・ナウマン (Friedrich Naumann) がいる。⁹ ベルリン大学の教授では、ローマ史で知られた後のノーベル文学賞受賞者のテオドル・モムゼン（後にアルフレートの妹 Clara はテオドル・モムゼンの息子の Ernst に嫁している）、解釈学の大家ヴィルヘルム・ディルタイ (Wilhelm Dilthey) など錚々たる名前が挙げられている。¹⁰ こうした政治家や学者・インテリ層との日常的な接触が自己形成に影響があったことをアルフレート自信も認めている。¹¹

アルフレート・ヴェーバーと同じ社会学者であった兄マックス・ヴェーバーとの関係は、常に微妙なものであったらしい。子供時代の優秀な兄との比較や、人前でその兄から軽んじられた事への憤懣などを、アルフレートはある程度の年齢になると直接表明するようになった。¹² 学

8 Demm (1997) S. 11. 参照。

9 父の政治傾向とも合致するが、フリードリッヒ・ナウマンは、現在のドイツの自由民主党 (Freie Demokratische Partei) の財団に冠された人名であり、アルフレート・ヴェーバー全集刊行の際の篤志家となったヴィッツェンマンという政治家もこの FDP 所属であるなど、両者の縁を物語っているが、アルフレート自身は第二次大戦後社民党に所属した。

10 Demm (2000a) S. 11. 参照。

11 同上。

12 兄マックスの伝記 (Hans Norbert Fugen (1985): Max Weber. Rowohlt, Reinbek bei Hamburg.) にも引

問的な見解・考え方などに違いがあったものの、『社会政策協会（Verein für Sozialpolitik）』や一時的な政党での活動を含めた実際の政治活動など多くの場面で協力していたことも事実である。¹³ また、プラハ時代での発言や、¹⁴ 後年のインタビュー¹⁵ を見ても、社会学者としての兄マックスへの評価（ドイツの偉大な社会学者）という点で曇りは無かったようである。

アルフレートの最初の大学教授としての赴任地プラハでの交友関係にも、いくつか特記すべきことがらがある。最初に触れなければならないのが、「アルフレート・ヴェーバーの略歴」でも紹介したトマーシュ・マサリクとの友情であろう。左派リベラルというレッテルが正確な表現になるのか議論の余地があるかもしれないが、親ユダヤ的でリベラルな考え方のアルフレートとマサリクは、初対面で「30分もしないうちに、市民レベルのおぞましい偏見をぬぐい落とすことや民主主義を通じて馬鹿げた民族主義の克服を試みなければという基本的な思想で一致した」¹⁶ のである。二人は「一般選挙権とオーストリー＝ハンガリー帝国の三民族自治制への移行」という意見でも一致していた。アルフレートがハイデルベルクに招聘された後、アルフレートの回想によれば、大統領になったマサリクの求めに応じて数度の会談の機会があったことも記されている。¹⁷

プラハ時代にも、教え子として後年名を馳せる人物がいる。その代表が、ユダヤ系ドイツ人のマックス・ブローとフランツ・カフカである。マックス・ブローはアルフレートについての回想も記している。¹⁸ カフカはアルフレートの下で博士論文を執筆しているが、アルフレートの講義や演習に引き込まれたのは、むしろブローのようである。ブローは学生生活の前半の退屈さと比較してアルフレートの演習で獲得した「学問的客観性」や「純粋な真理」への感慨を体験したことについて、強い感謝の念をいだいたようである。¹⁹ ブローも作品の中でアルフレートをモデルにした人物を登場させているが、カフカは、アルフレートの官僚制批判に触発されて『流刑地にて（In der Strafkolonie）』という、人間をシステムティックかつ機械的に処刑する近未来小説を描いている。

アルフレートの教え子（Schüler）という意味では、無論ハイデルベルク大学に招聘されて以降の時代は、さらにめざましいものがあると言えよう。まず社会学者という範疇には収まらないが、エーリヒ・フロムはアルフレートの下で博士論文（テーマはユダヤ法）を書いている。

用されている1887年8月2日付けの書簡はその典型例である。

13 Demm: „Alfred Weber und sein Bruder Max“. In: Demm (2000a) S. 27-62 参照。

14 同上。In: Demm (2000a) S. 32 参照。

15 Das Eubank-Interview (1934) In: Alfred Weber-Gesamtausgabe Bd. 8, S. 428-430. 参照。

16 アルフレート自身の回想による。Alfred Weber: „Begegnungen mit T. G. Masaryk“. In: Demm (2000b) S. 41-50 参照。

17 同上。

18 Max Brot: „Alfred Weber in Prag“. In: Demm (2000b) S. 85-90 参照。

19 同上。

とりわけ戦後の教え子で目につくのは、個々の氏名は省略するが、主要な日刊紙や公共放送などのメディアで活躍することになるジャーナリストの一群がいる。また、その後政治家になった人たちでは、1960年代の連立内閣で経済大臣を務めたカール・シラー、ラインラント・プファルツ州とチューリングゲン州総理大臣を歴任したキリスト教民主同盟のベルンハルト・フォーゲル（アルフレート最後の個人秘書）などがある。

研究者で目につくのは、社会学者以外の範疇で、例えば政治学者のカール・ヨアヒム・フリードリヒ（Carl Joachim Friedrich）、アルノルト・ベルクシュトレッサー（Arnold Bergstraesser）、アレクサンダー・リュストウ（Alexander Rüstow）などである。

ハイデルベルク大学でアルフレートの指導を受けた研究者には、何人かの外国人学生もいる。タルコット・パーソンズ（Talcott Parsons）はすでに没していた兄マックスの著作には影響を受けたようだが、アルフレートには惹かれなかったらしい。²⁰ それでも1927年にアルフレートと同僚レーデラー（Emil Lederer）²¹ の指導下で博士学位を取得している。ブダペスト大学で博士学位を取得し、第一次大戦後の混乱期にドイツで教授資格請求論文（Habilitation）を書こうとしていたカール・マンハイムもユダヤ系の外国人ということになる。マンハイムは1921年にハイデルベルクにやってきた。当時のドイツは、ヴェルサイユ体制下で外国人やユダヤ人に対する偏見が強く、しかもマルクス主義に対する風当たりも強いという、いわば三重苦のなかで、アルフレートが教授資格請求資格認定のために積極的に動いたことが Demm (2000a)²² に詳しく記されている。これは機会を改めて論じる必要があるが、アルフレートの文化社会学といわれるものとマンハイムの知識社会学との関係も関心を呼び、これまでも取り上げられることの少なくないテーマである。

最後に取り上げるエリーザベト・フォン・リヒトホーフェン（Elisabeth von Richthofen）²³ という女性は、アルフレートにとっていわばもっとも重要な人生のパートナーであった。通常アルフレート自身も伝記的な文章も含めて彼女のことをエルゼ・ヤッフエ＝フォン・リヒトホーフェンと呼んでいた。彼女は自身国民経済学や社会学を専攻し、1901年にはマックス・ヴェーバーの下で博士学位も取得している。ベルリン大学のシュモラー門下のエトガー・ヤッフエ（Edgar Jaffé）と結婚するも、アルフレートと懇意になり、1921年の夫の死後以降は、彼にとってもっとも重要なパートナーであったことは、著作の献辞にも現れている。²⁴ 因みに、第一次大戦で「赤い男爵」として名を馳せた空の英雄マンフレート・フォン・リヒトホーフェンは遠縁

20 Molt (2002), S. 92 参照。

21 ユダヤ系の経済学者で、1925年に東大で教えたこともある。

22 Demm: „Karl Mannheim und Alfred Weber“. In: Demm (2000a) S. 251-266.

23 Demm: „Alfred Weber und sein Bruder Max“. In: Demm (2000a) S. 27-62 および Else Jaffe: „Biographische Daten Alfred Webers (1868-1958)“. In: Demm (2000b) S. 65-83 参照。

24 例えばライフワークとされる『文化社会学としての文化史』には彼女への献辞がある。

にあたり、プロイセンの外務次官オスヴァルト・フォン・リヒトホーフェンは父の従兄弟、作家で翻訳家であった妹のフリーダはイギリスの作家 D. H. ロレンスの妻であるが、ロレンスも確認されている限りで二度ほどはアルフレートと会ったことがあり、自分の小説のなかにアルフレートをモデルにした人物を登場させている。²⁵

3 日本におけるアルフレート・ヴェーバー受容

日本におけるアルフレート・ヴェーバー紹介はまったくないと言っては事態を正確に表しているとは言えない。無論、そこにはいくつかの痕跡がある。基本的には、アルフレート・ヴェーバーの業績が示す通り、三つの業績領域に沿って紹介がなされている。それは、彼が博士論文や教授資格請求論文で扱った(1)経済社会学、(2)実践をも含む政治社会学、そして(3)文化社会学の三つの領域である。

日本でアルフレート・ヴェーバーという名前で直ぐに連想されるのは、彼の工業立地論 (Ueber den Standort der Industrien (1909)) であろう。この著作には2009年6月時点での国内大学図書館の所蔵データによれば3種類の和訳 (1938年刊行江澤譲爾訳『工業分布論』、1966年刊行日本産業構造研究所訳の『工業立地論』、1986年刊行篠原訳の『工業立地論』) もあり、現在の日本でも経済学研究者に取り上げられることがある。とりわけロシア語訳を通じて20世紀ソヴィエト連邦のコンビナート建設の際に参考にされたという話がよく紹介される。アルフレート・ヴェーバーは、ビスマルク式プロイセン帝国のドイツ統一興隆期に成長するなかで、ドイツにおける政治にも強い関心を持ち続け、積極的に発言も続けた。無論、これは彼の父であるマックス・ヴェーバーが帝国議会議員であったことや彼の家には当時のベルリンのインテリ層や政治家が頻繁に出入りしていたという環境に負うところが大きいことを、アルフレート自身がいくつかの自叙伝めいた文章に記していることは前にも触れた。²⁶ そうしたなかで表わされた彼の政治学の著述に関しては、若干論考が散見される。兄マックス共々に主張していた「リーダー民主主義 (Führerdemokratie²⁷)」に関するものも見られる。それは、彼らヴェーバー兄弟の論旨がえてしてヒトラーナチズム成立を予見ないし、願望していたかのように誤解される余地があったからといえるかもしれない。²⁸ ただし、これに関して一言だけ触れておくと、アルフレートはムッソリーニ個人には感嘆していたらしいが、一貫して体制としてのファシズム

25 Molt (2002)、同上、及び D. H. Lawrence: „Professor Sartorius“. In: Demm (2000b) S. 98-101 参照。

26 Demm (2000b)所収のアルフレートの文章を参照のこと。

27 皮肉なことに、Weber 兄弟が使用した普通名詞としての Führer が、ワイマール体制末期における大統領と宰相とを兼務したヒトラーによって「総統」という職名に用いられている。

28 Demm: „Alfred Weber und sein Bruder Max“. In: Demm (2000a) S. 27-62 参照。同所には、ルカーチの La destruction de la raison. Bd. 2, Paris 1959, S. 207 も注に挙げられている。

には反対の態度をとり、²⁹ とりわけナチズムに対しては文字通り身を賭して拒絶の態度を貫いた。³⁰

アルフレート・ヴェーバー本人も後年公言していたライフワークのテーマである文化社会学に関しては、1950年代に、いわば当時没した直後のアルフレート・ヴェーバーの文化社会学に注目し、『Prinzipien der Geschichts- und Kulturosoziologie (歴史社会学および文化社会学の諸原理)』のごく一部(『諸原理による特殊な照明』の章の一部)など三本の文化社会学関連の論述を和訳した山本／信太／草薙(1958)の労作が、その紹介の嚆矢といえるだろう。山本／信太／草薙(1958)³¹は、その「あとがき」のなかで若干の解説を試みており、アルフレート・ヴェーバーの文化社会学の特徴を、(1)オスヴァルト・シュペングラー(Oswald Spengler)やアーノルド・トインビー(Arnold Toynbee)と比較対照した文明論であること、(2)総体的な社会学を企図していて、従来型の社会学を社会論(Gesellschaftskunde)と区別していること、(3)人類の歴史的展開を考察する際に、個別対象として歴史体(Geschichtskörper)を設定し、個々の歴史体に対して分析のレベルとして三つの概念、すなわち文明プロセス、社会プロセス、文化運動を立てていることなどを特徴として挙げている。³²

また、柴野(1979-1990)は、文字通りアルフレート・ヴェーバーのライフワークとされる『Kulturgeschichte als Kulturosoziologie (文化社会学としての文化史)』を「翻訳研究」と銘打って、訳出しようと試みたものであるが、その目的や意義付けなどについては、すでに山本／信太／草薙(1958)で指摘・紹介されたこと以外にこれと目新しいポイントは見あたらない。また本文498ページ中の175ページまで進んだところで訳業が中断したままとなっている点が大変惜しまれる。³³

この三者の他には、マルクス主義者の戸坂潤が、イデオロギー論のなかで、「文化社会学批判」

29 Demm: „Alfred Weber und sein Bruder Max.“ (In: Demm (2000a) S. 27-62.) S. 51 参照

30 Demm: „Zivilcourage im Jahre 1933. Alfred Weber und die Fahnenaktionen der NSDAP.“ (In: Demm (2000a) S. 309-323.)参照。

31 山本には単独での文明論の著書(山本新『文明の構造と変動』(1961))もある。

32 若干時代は下がるが、『ドイツ社会学思想の形成と展開』(1976)や社会学叢書のなかの一冊として刊行された『文化社会学』(1968)のなかで秋元律郎もアルフレート・ヴェーバーを論じているが、その評価などについては別の機会に紹介したい。

33 山本／信太／草薙(1958)ら自身も、山本／信太／草薙(1958)の訳業を紹介している柴野(1979-1990)も、山本／信太／草薙(1958)の第1章が『Prinzipien der Geschichts- und Kulturosoziologie (歴史社会学および文化社会学の諸原理)』第2章の初出が、雑誌論文 Weber (1921)であるとしているが、二つのテキスト間には、タイトルの相違を含め、幾ばくかの異動があることをまったく無視している。例えば、第8節の原注としてトインビーに言及しているが、初出の雑誌論文が刊行された1921年の時点では、まだトインビーの主要著作は公刊されておらず、当然それに関する注もない。また、第二章として掲載された文章も、出典とされる社会学辞典の「Kulturosoziologie (文化社会学)」の項目のすべてを訳出したものではなく、タイトルも。原典には無い独自の「歴史の内的構造論としての歴史・文化社会学」(Geschichts- und Kulturosoziologie als innere Strukturlehre der Geschichte)を付し、少なくとも原典を構成しているA章からF章のうち冒頭のA章を省略している。またこうしたことの理由も明示していない。

を著している。³⁴ 戸坂は基本的に「イデオロギー概論」を論じているので、勢いその中心はマックス・シェーラーであり、カール・マンハイムになりがちであるが、「文化社会学批判」の第二節では、もっぱらアルフレート・ヴェーバーを紹介し、論じている。戸坂が論じた直接のテキストは、その言及された註から推測すると、山本／信太／草薙（1958）が第2章としてその一部を訳した1931年刊行の社会学辞典の「文化社会学」の項目と、Weber（1927）の第一部「原理的なもの」にある「社会学上の文化概念」、そして Weber（1921）の論文である。管見によれば、戸坂はアルフレートの文化社会学をもっとも緻密に紹介し、論じている。アルフレートの言う「歴史が…文化的…」³⁵ つまり「精神的…、心的」であることから、文化社会学が歴史理論になることから始め、しかし「文化社会学は、歴史的事件の間に一定の規則性を見出し、「歴史的・社会的・な Konstellation」に立って歴史内容を処理する」ことを紹介している。同時に文化社会学と歴史哲学との関係について、「文化社会学が歴史哲学を背景として」いて、「歴史哲学の…新しい形態」であること、「歴史哲学が先天的な歴史理論」であるのにたいして、文化社会学の特徴として「実証的・経験的・な研究に基」き、「帰納的方法を用いなければならない」というアルフレートの主張を示している。さらには、従来の歴史哲学、とくにヘーゲルとの対比で、本来「精神的な」はずの歴史は「物体的な形象」としても顕現する事実から、「形而上学的・哲学的」な問題（「イデーの高み」）と「現象の世界・形態の世界」（「社会現象の平面」）での取り扱いとの両方が文化社会学であるという点も示されている。戸坂の理解は、タイトル

表(1)

社会過程（Gesellschaftsprozess）	
文明過程（Zivilisationsprozess）	文化運動／文化動向 ³⁶ （Kulturbewegung）
知識的な直感や概念や思考から生じる処の客観的・普遍的・非人格的な世界	感情を基盤として生じる処の個性的・具体的・人格的な世界
合理的・主知的 因果的・機械的（過程） 論理的・不変妥当的・必然的な継起 正・不正という論理的価値標準も適用可 合目的的・実用的	非合理的、全人格の感情の所産 生命感や愛が支配 各々の時代の一定の定位の範囲内で作用 異なった時代の定位には異なった作用 一遍一遍完了、一回的 没落・静止・劇変・改革・復興あり 方向・目的なし 創造、発出（エマネーション） 進歩せず（哲学大系・宗教・芸術） 一定の周期性・リズムあり
進化	

34 戸坂潤（1966）参照。山田吉二郎氏の指摘による。

35 以下、戸坂のアルフレート論の引用箇所については、すべて戸坂（1966）による。
一部技術上の問題で強調点などは除く。

36 「文化動向」は、Kulturbewegung に対する戸坂固有の訳語。

にも明示された三つの範疇の内、とくに文明プロセスと文化運動との峻別に力点を置いている。こうした二つの範疇系統に関わる術語や形容表現を整理すると、表(1)のようになるであろう。

戸坂によれば、アルフレートの文化概念にはロマン主義的な「審美的性格」が認められる。そして文化は「感情による象徴的影像」であり、「生物的生命の存続などにとっては」余計なものなのである。そうした高貴さ故に、文化内容の二側面として、「人格が世界を自己の内に取り入れる」「芸術作品」(芸術家)と「人格が世界形象の統一を構成する」「イデー」(預言者)が挙げられるのである。また、アルフレートの文化社会学を科学の類型上「解釈学的なもの」としている。³⁷それは、文化が「精神の、社会に於ける表現」だからであり、「文化的面貌・文化的骨相」を示すものとなる。表現という側面を考えると、「文化は…類型化される外に途を有たない」とされ、形態学的な扱いを受けるというところにいきつく。

戸坂のアルフレート・ヴェーバー流文化社会学論は、彼がその本質にあると見た「ドイツ形而上学的・宗教的・観念論の解釈学的なロマン主義的・歴史主義的」性格のために、最終的にはマルクス主義唯物論の立場からのブルジョア社会学批判という結論に終わっている。³⁸

4 今日におけるアルフレート・ヴェーバー評価の試み

20世紀初頭からナチス時代の空白を挟んで、戦後とくにその活躍の華々しさを迎えたアルフレート・ヴェーバーではあるが、冒頭に触れた通り、その死後は取り上げられる機会も少なく、あるとすれば兄マックスとの関連、あるいはカール・マンハイムなどとの関連で論じられることが多かった。そこには、肯定的な影響力を踏まえた評価と社会学者として何ら評価に値しない忘却すべき対象であるという否定的な評価とのきわめて大きな幅を認めざるをえない。そうした評価の幅を簡潔にまとめた一例として Molt(2002)の記述を挙げることができる。因みに、ペーター・モルト (Peter Molt) 自身は1956年にハイデルベルクで博士号を取得し、長らくドイツ政府や国連などの機関で発展途上国との協力分野で実務経験を重ねた人物であり、1954年から1956年までアルフレートの助手を務めていた人物である。³⁹その意味では書き手として中立的な人物ではないが、肯定面・否定面が手際よく紹介されている。

《現代ドイツ社会学からの酷評》

モルトは真っ先に否定的な意見を紹介するがそれは相当峻烈なものといえるだろう。とりわけその否定的見解の表明者が今日の社会学者であることが目を惹く。社会史家ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー (ベルリン自由大学・ビーレフェルト大学) は、「この本は方法論的に絶望的な

37 ベルリンのヴェーバー家にディルタイが出入りしていたことを想起されたい。

38 三木清 (1966) もアルフレート・ヴェーバーの文化社会学について類似の立場から紹介している。

39 モルト自身の略歴はトリア大学 の HP (<http://www.politik.uni-trier.de/mitarbeiter/molt/cv.pdf>) に掲載された情報を簡略にしたものである。

ほど古くさく、曖昧な空論に立脚し、紛らわしい空想の国に連れ込むような、漠然とした決まり文句から抜け出せずにいて、「忘却に留めておくことが慈悲だ」と言い放っている。⁴⁰ ヴァルター・ビュール（ミュンヘン大学）は、「アルフレート・ヴェーバーの文化社会学はルサンチマンのこもった文化批評」で「まったくの失敗作」と述べている。⁴¹

《実体験に基づくアルフレートの危機感》

こうした批判に対して、モルトは、「アルフレート・ヴェーバーが今日的な意味での社会学者ではない」ことを率直に認めた⁴² 上で、アルフレートの中心的課題として、「社会的に統合された人間の変容とその運命への問いかけ」⁴³ という点を挙げている。ほとんど90歳の高齢に達したアルフレートは、ビスマルク政治の実態を直接関わった当事者達から聞き育ち、第一次世界大戦での敗戦、ワイマル共和国の瓦解とナチスの暴政（アルフレートは12年間という気の遠くなるような隠棲の日々を過ごした）という試練を自らくぐり抜け、「西洋の遺産たる自由と人間性を求め続ける人間の維持」⁴⁴ という関心事ゆえの危機感に突き動かされていたとモルトは指摘する。その危機感の根拠となったものとして「官僚制的な装置化、全体主義やナチスの、人種差別的、社会宗教的イデオロギーへの逆戻り、人文主義的倫理から解放された自然科学の進歩の成果への盲信」⁴⁵ をモルトは挙げている。

《歴史社会学の意義》

そうしたアルフレートにとっての社会学とは、「啓蒙主義と工業化にともなって生じる生活事情の変動ダイナミズムのなかで歴史診断、時代診断を通じた方向付けを見いだす」要請から生まれたはずであり、コント、スペンサー、マルクスの社会学初期から歴史社会学であったし、あり続ける」⁴⁶ ものとされたのである。したがってアルフレートにとっての社会学は、「人間の社会関係の結果としての歴史の分析や歴史解釈と歴史理論との取り組みなしに」⁴⁷ 成り立たない。

《総覧対比的方法（Synoptik）》

そして、そのとき注意すべき重要な点としてモルトは、アルフレートの考えにおいて「人間の形成、人間の気質を可能な限り厳密に、経験的に認識する」こと、「個別の要因に関する知識を集めただけでは歴史状況の全体認識に至らない」こと、「全体認識は、総覧対比やそれぞれの配置構成の分析から生まれる」こと、「すべての現実の諸要因を総覧対比的に評価する」⁴⁸ ことの

40 Molt (2002), S. 89. 参照。

41 同上。

42 Molt (2002), S. 95. 参照。

43 Molt (2002), S. 94. 参照。

44 同上。

45 同上。

46 Molt (2002), S. 94. 参照。

47 同上三章。

48 Molt (2002), S. 95. 参照。

重要性を示している。

具体的には、アルフレートの文化社会学で方法として導入されるのが、歴史体 (Geschichtskörper) という歴史上の主体について、三つの分析レベルを立てることにしている。それが、a) 技術科学的な進歩、すなわち文明プロセス、b) 「社会関係の複雑さの増大を体現する社会プロセス」、c) 「精神的霊的な人間の形成」を扱う文化運動である。⁴⁹ ただし、これらは、「固定的な範疇ではなく、発見的な原理」であって、「有用な補助手段」(Dolf Sternberger の名前を出しながら) であるとモルトは言う。

《アルフレートが求めたこと》

アルフレートが自らの体験と危機感を背景に、文化社会学研究を通じて求めたのは、「未来への予言という主張を求めずに、時代の診断を行うこと」⁵⁰ であり、「対比総覧こそが行動の余地を示して、否定的な展開とは逆方向への方向付けを与えてくれる」⁵¹ という希望である。そのとき、「現実的なものの認識においては価値中立的で、対比総覧の点と行動の余地の呈示の点では価値をはらんでいる」⁵² ことも合わせてモルトは指摘している。

以上を踏まえて、モルトはアルフレートのもつ今日的な意義を以下のようにまとめている。「文化史、文化社会学、政治文化と学問的に取り組むことが現代において重要性を増して」、社会科学の課題としての「歴史的な立ち位置に基づいた新しい思慮と対峙すること」、「西洋文化を規定してきた構成配置 (Konfigurationen) が変動」するがために、「繰り返す新しい時代診断が必要」であること、そして、その診断は、「個別科学ではなしえず、普遍的な価値を志向し、対比総覧的にしか獲得できない」。

5 アルフレート・ヴェーバーの文化概念

本邦における数少ない山本らの紹介のように、アルフレートの文化社会学の出発点については、(その時間的特定についての必然性あるいは偶然性に関しては検討が必要であろうが) やはり雑誌『社会学および社会政策論叢』第47号 (1920/1921年) に発表された「文化社会学に関する原理的なもの」(Prinzipielles zur Kulturosoziologie) に着目されることが多い。勿論、文化社会学に関係した著述を最初にまとめた著作としては、1927年に刊行された著書『国家社会学および文化社会学に関する理念』(Ideen zur Staats- und Kulturosoziologie) や、それ以前の

49 Synoptik/synoptisch という用語は本来新訳聖書学で、共通の原資料に依拠すると言われているマルコ、マタイ、ルカの三福音書を分析する際に用いる。意図的か偶然かは不明であるが、アルフレートも文化社会学での分析に三つの分析レベルを一つの歴史体に適用するかたちをとっている。文明プロセスに科学技術を、文化運動に宗教や芸術を想定することは知られている。

50 Molt (2002), S. 95. 参照。

51 同上参照。

52 Molt (2002), S. 95. 参照。

1921年に刊行された『ドイツとヨーロッパの文化危機』(Deutschland und die europäische Kulturkrise)もある。後者は、わずか60ページ足らずの小冊子の体裁をとったものであるが、シュペングラーに代表される危機意識をアルフレートなりにかたちにしたものであるろうし、ローマ史家のテオドール・モムゼンを論じた文章にも、ローマの没落にドイツやヨーロッパの運命を重ね合わせた表現が散見される。そこでアルフレートはモムゼンという人物を通してプロイセン帝国への悲観や失望を表現している。アルフレートの文化社会学を検討する上で、1927年の著書『国家社会学および文化社会学に関する理念』には、その「テオドール・モムゼン」(Theodor Mommsen) (1906) が収録されている他、「文化類型とその変貌」(Der Kulturtypus und seine Wandlungen) (1909/1910) もある。これは同年ハイデルベルク大学の学生組織の年鑑に掲載されたものだが、⁵³ 従来紹介されることがなかったこと、ごく初期のアルフレートの文化に対する考えでありながら、後の文化社会学の萌芽のいくつかを垣間見ることができると思われるので、以下に紹介することとする。

6 「文化類型とその変貌 (1909/1910)」⁵⁴

今日の教養ある者が、彼の時代の文化類型の「造形美術家」⁵⁵ であることにたいしてそもそも感性をもつものかどうか、そしてそれがどういう仕方でのことか、私には分からない。同様に分からないのが、——彼の中に陶醉や高揚意識に関して何か息づくものがあるかどうか、その何かを手段に彼の「歴史における始祖」、ルネッサンス文化の人間が、意識的に自らに形を与え、またその形を使って他の者たちのための模範を創るという意味で「自らを造る」営為を進めたのだが、——彼のなかに「芸術作品としての人間」という自己観、ブルクハルトがわれわれのために取り出してくれた、かのもっとも美しいルネッサンスの遺物が、ほんのかすかにでもまだ生きているのかどうか、——あるいは、有用性が——厳密には、近代的官僚制国家が教育を「職業」と「地位」の前提にして以来、いわゆる教育が貶められてしまった月並みな習得機能というものだが、この習得機能というものがその広い影で、本来の教育されるということの輪郭への視線を遮ってしまったのかどうかということである。その精神的な小銭稼ぎに対するきわだった本能をもった功利的な今日のドイツにたいして、もっとも酷い事態を恐れているとはいえ、それがどんな具合なのか、私には分からない。ドイツはなるようにしかならないのかもしれないが、しかし本来の教育機能は教養ある者達の大多数にとって今日完全に遮られたままなのかもしれない、——教養ある者が「自らを見つめる」見方、彼が自分自身から何を形作る

53 Heidelberg Akademischer Almanach der Freien Studentenschaft WS 1909/1910.

54 原註1) 自由学生同盟の『ハイデルベルクアカデミー年鑑』1909/1910年冬学期版より。

55 訳註1) Bildner には教育者の意味もある。

かについて持っているイメージ、彼の文化意識が、今日なおひとつの民族の文化にとってかつてと同じく根本的な意味をもつというのは、事実である。この事実が、その民族の平均的な文化類型を創っているのである。それも、今日部分的には別の経路、とくにより複雑な経路を通してであり、単に真似されることによるのではなく、報道や他のことのような意識的な手段によってであり、かつてとは全く違った組織のなかで民族の平均的な文化類型が創られるのである。しかし、教養ある者の自分自身に関する文化意識は、事実今日もかつてと変わらず、すべての文化発展の大衆的基本要素、——新しい理念と客観化が埋め込まれ、それによってまた養われるはずの土壌である、もし、自らの時代にとって生き生きとして意味を維持するように定められているのであれば。

さて、われわれドイツ人は、普遍性と深奥の自己意識を備えて19世紀に足を踏み入れた。この普遍性と深奥は、疑問の余地無く多くの時代と民族が、そこに到達することもなく、われわれを羨んでもおかしくはないものである。ビスマルクが名付けたように、「行為のない時代」からわれわれは生まれたわけだが、その時代は、われわれに自己分析の能力を、われわれの内部に諸々の世界とその世界の対立とを発見し、それらと人類史の全体的な文化内容とを関係づける可能性を与えた。——それは、事物を内的に把握し、しかし同時に事物や自分自身とも距離を置くという、一つの才能であり、この才能の前で、われわれが例えば当時の時代の一致するもののなかにそうしたものを見つけると、異国のすばらしい世界の前に立つときのように驚きをもって対面するのである。われわれドイツ人は19世紀初め教養層のなかでは、単に全方面的な「教養」のある民族であるばかりではなく、文化要素が人格と性格とに移行した人間たちのいる民族だったことは疑問の余地がない。文化要素は魂のなかに深奥を露呈させ、相貌を形作り、対立を引き起こし、とてつもない豊穡を展開したのである。そこから生じた、この「ロマン主義的類型」は、現実、とりわけ政治的現実に対して極端に不器用だったかもしれないが、過去には途方もない文化的な富があるという感情のなかで、この類型があらゆる人間の文化事象同様、完璧にしかも極限に近い度合いで、その過去の文化的な富を自らのなかで生き生きとしたものにさせる力をもっていた。この類型はその時代の民主的単純化に背を向けていて、そのために実際上は圧倒的に反動的、つまり、生産的ではなかったかもしれないが。しかし、この類型が過去とその偉大さ全体を発見したように、すべての人間的なものの内的な関連に対する強い気持ちで、何か必然的なものとしての「全方面性」をも感じ取っていて、最終的に先行する時代ではまだ「超越的」だった「政治」をも実際発見したのである。

こうした普遍的で同時にきめ細やかな類型に関して、ドイツの教養人から——ああ、天と自然の奇跡か——一時的に柔軟で才気に富み、そう、気の利いた人間の種類を作るということを成し遂げたこの類型とそれに基づいた文化意識に関して、われわれは今日まできわめて奇妙な発展を、愚鈍化とは言わないでいくが、継続的な浅薄化、単純化という発展を一通り経験したのである。これは、生まれつつある次の形式である若いドイツ的類型では、まだ感じられない。

というのも、この類型に前時代の数多の幻想による扮装もなくなったとしても、そしてこの類型がまさにそのために現実の事物を部分的に今までよりはっきりと見るとしても、それはまだ内的なものの貧相化という犠牲の上でのことではない。この類型は、既存の文化要素の富全体をその形成に使っているし、ロマン主義的類型のように、まだ必然的な二律背反も、しかしまたそこから生じる深化させるような二律背反も感じ取っている。つまり、その自己意識は複合的で、それがために文化的な意識のままなのである。しかし、政治的な問題が実践化することから出てきている1848年世代のドイツ人はもうすでにどれほど単純な存在となっているだろうか。——彼のなかでは、ロマン主義者のなかであらゆる何らかの到達可能な文化要素の熱狂的な受容が引き起こした内的なものの亀裂が、その亀裂の深みの前でときには途方に暮れるとしても、驚嘆しながら彼は立ち尽くしていたのだが、閉じられているのである。その亀裂の上には瘡蓋ができたのである。それと結びついたすべての問題、それに依存している個人の全多様性が、消えてしまうことで、われわれは、われわれが直面する人間を、彼自らがもたらす美しい表現法の雲りによって、表面的なものとして感じてしまう。われわれはこういう人間を思わず知らず二つの単純な部分に分けて見ている。一方は、行儀良く正直に了解された自由な理念が支配する公的な存在に向けられたもの、そしてもう一つは私的な部分で、全体としてただ文学的に（もはや人格を形成するものではない）把握された「古典的な教養」の理想が支配していて、ブルジョア的な家庭感覚の雰囲気の中に浸っている。——ひとりの「愛すべき」人間——しかし、われわれの大きな文化問題のたった一つさえ解くのものにはや適さないのは、かれがそうした問題をその核心部分でもはや感じるができないからである。

視野をいくらか拡大してみよう。われわれが直面しているのは、とてつもない変貌とそこから生じた類型であり、——迷うことなく言えることだが——その類型はビスマルクが造ったものである。われわれの身に起こったことは、次のように表現できるものだ。われわれの存在の両面、公的な面と私的な面とで、いわば「表札」、上書きが裏返しにされている。そして、政治の面には、リベラリズムの代わりに「リアリズム」というトレードマークを使って保守的な日和見主義が現れ、個人面では、理想主義のトレードマークの代わりに現実主義のそれが、つまり直近の利益に着目する生活の処理が現れるのである。それ以来というものの、われわれは浅薄になっただけでなく、ふたたび単純化にもいたってしまったのである。というのも、「理想主義」と一緒に、われわれの古い理念世界の残余も、その文化問題と人格観、その「思索と詩作」が失われてしまったのである。驚愕した世界の眼前に立っているのは、昔のひだから削り取られ、呵責や疑いに苦しめられることももはやない、肉体的にも精神的にも「(軍隊式に髪を)短くカットした」、活力があり、組織された新ゲルマン世界の現実主義者、モムゼンが痛々しく命名したように「再野蛮化した人間」である。

しかし、それで終わりというわけではない。今日われわれが目にしてるのは、もっと何かに別のものである。このビスマルク風類型は、単純な方向性をもったものとはいえ、非常に強烈

な共同体感情をもっている。この類型が国民的な力の組織形態と感じた公共的な事物というのは、そのためであれば、その類型の力と関心との一部を、先行したリベラル類型が自由な人格と国民的文化のための闘争の観点でしたのと同じ自明さで、献げるような何かであった。このリベラル類型は、あらゆる細やかな細分化の無い中核だけではあったが、この中核は、相変わらず二つの面、公共的な面と私的な面とが一緒にされたものだった。——しかし、公共的なものへの関心は、国民的な成功に結びつけられていた——この国民的成功が古くさくなってしまい、新しい成功が現れないことで、公共的なものへの関心もしぼんでしまったのである。そして、われわれはそれによって、最後の決定的な転回点に直面することになる。われわれの文化類型の公共的な面は、萎縮していくのである。われわれの文化類型は、純然たる「生活実業家の」類型に変容する、それは、経済的な職業生活という実業家であるかそれ以外の職業生活としての実業家であるが、それに違いはない。現実政治的に行き過ぎることもあるが、——われわれの文化類型は、それをビスマルクに学んだことを自慢する——しかし、その「現実政治」は本質的に、自らにもっとも身近な事物の支配のために使われるばかりで、それは結局その個人的、あまりに個人的な関心のために使われると言うことである。先行した類型には、まだ偉大さがあったが、われわれのそれは矮小であり、たしかにときに——月並みである。これが、われわれが今日自らの周りにキノコが陸続と生えるかのように目の当たりにしている類型であり、われわれの一世紀にわたる「発展」の最新のすばらしい産物である。この類型は非常に単純かつ限定されたもので、われわれの国民的文化の流れを、その狭くなった魂の水門を通してせきたてる力はなかった。こうした流れは部分的に脇に流れ出したのである。そしてその結果、われわれは今日その反作用として、それと並んで別のものが広がるのを目にしている、多かれ少なかれいつでも、しかしいろいろな時代にそれぞれの健全さによって存在の強さの異なる類型、「文化耽美主義者」の類型である。この類型は、政治的、それ以外の共同体の関心を意識的にあまり評価しないのだが、その点に加えて熱心さの点でも実業家と共通であり、生活とはまったく接点が無く、誇り高い態度をもち、寄る辺ない精神的な興味の育成に「専門化している」のである。

冷静で、節制した態度の実業家とこの文化耽美主義者、われわれの立つ場所はこの人間居場所である。疑いを持つことがあるとすれば、外国人に聞くがよい。彼らの口からは賛嘆の言葉が「あふれ出す」だろう、——ふつう耳にする賛嘆の言葉だが、——われわれの経済的な美徳、勤勉、活力、組織的能力、信頼性、規律等々。しかし、彼らに思い浮かぶかもしれない、ドイツ人を超えるものに関する問いは、かれらを困惑させるだろう。そして、かれらが正直であれば、最終的に私の知り合いのロシア人のように答えるだろう。外国人にとってはときどき現代のドイツ人には霊界（＝第四の次元）が無くなってしまったかのように思われる。その言葉に事実、ことの由来の一面が表わされている。そしてそれに付け加えるべきなのは、ただこの現在責任を負うべき本拠を無くした霊界も、ドイツではすべてが専門化されているのに、

当然ながらその特別な代理人たちがいるが、しかし一般に他の三つの次元の代理人たちがそこには欠けているのだ。——

こうした状態に至った展開は、まちがいなく避けられないものだった。それは、純粹に外的な因果性という意味だけでなく、われわれがこの展開を創り上げた目標設定からはまるで逃れることなどできなかったという広い意味でも必然的だった。われわれが立っている狭い地理的空間で、急速に増大する人口を抱えるや、他の何にもまして経済的な目標を設定すること、ひとつの民族となるよりしかたがなかったのだ。諸民族間にあって、この民族は、確固とした地位を手に入れ、特定の経済的課題を手に入れてしまうまでは、そのエネルギーを労働とその評価に投入しなければならなかったし、あるいはいまでもしなければならないのである。なぜなら、自然はこの民族にこうした民族間で小さな居場所以上のものを与えなかったからであり、その居場所には人工的に張り出した複数階の建造物を造り上げなければならなかったのである。——同じことで、われわれは組織、規律などを、まずはわれわれ全体のそれ以外の共同体生活の支配的要因にせざるをえなかったのである。なぜなら、われわれの国際的な状況では緊密な組織化によらなければ本当に自立的な国家的存立を維持することはできないと繰り返された見識は正しいからである。そのために、われわれが、その生の必然性を理解している健全な民族とは違ったのであれば、挙げられたすべての現実的な有能さの諸性質の評価がわれわれのところで継続的に増大し、そこから構築された類型がますます前面に立つほかなかったのである。今話題にされたこの変貌全体は、この必然的なプロセスの偽装にすぎない。

しかし、このプロセスは残念ながら必然だったとわれわれは言わねばならない。そして、われわれがこの「残念ながら」を熟慮すべき時期がくる。というのは、これまで言われてきたことが事態を尽くしているのなら、事態は実際そうであるほどはひどくはないだろう。そうだとすれば、たしかに民族としてのわれわれは19世紀初頭に立っていた、精神的に指導する誇り高い地位から、国際的な諸民族社会のなかで経済的には有用で、政治的には注目すべき成員というレベルに凋落したであろう。しかしわれわれは、善人役としての、このやや単純な役割を行儀よく謙虚に期待して待つことができただろう。——しかしながら、まだ他のことがある。教養ある者のどんな類型も、模倣と一般化には服すように、——そうした類型は部分的にはそのために存在するのだが——そして、その類型がそのことを通じて、いわばいつも彼の戯画であるかもしれない、しかしいずれにしても彼自身の価値や否定的価値を完全に暴露してしまう自分の影を傍らにともなっているように、今日われわれを支配しているふたつの類型も同じように自然なのである。その二つの類型がわれわれの生活のなかに投げかける影ではじめて、われわれはその類型の十全な文化上の意味を計ることができるのである。しかしこの影とは、純然たる実業界と職業専門家世界の現実的な有用性が支配する雰囲気の中で広まる「皮相なエピキュリアン」の類型であり、そして、文化耽美主義者の世界の雰囲気の中でそれをする「貴族めかしたおしゃべり屋」の類型なのである。後者の方は放っておこう、なぜなら後者には道

化師の帽子をただかぶせておけばいいのだから。しかし、前者は、われわれがそれを生み出すことで危機に瀕するような、市民的大衆類型である。——この大衆タイプの登場は、今日外国で——たとえ辛いことでも迷わず言うが——われわれを「軽蔑し」始めていることへの説明となっている。実際のところ、われわれが半年ごとに毎度の旅行シーズンにわれわれの国境越しに放り出す人間のタイプを見てもらいたい。この人間のタイプは、その特徴的な輪郭が、異国の環境と横にいる他国民の人間タイプから浮き立っているところを、国境の外側で目にとめてもらいたい。こうした輪郭の本質がその平均でどのような点にあるのか、きわだった肥満が単純さや粗野な横柄さと組み合わせられ、内面と外面の現象の絶対的なまでの通俗性が、物質的な楽しみや生活の些事をおぞましいほどに重要視することと結びつけられることで、いかにこの輪郭が描写されているかを、心の中で慄然としながら感じてもらいたいものである。それを感じてもらえれば、それを「理解する」だろう。——今日あるフランス人が、非常に好評を博した新しい本のなかで、現代のドイツを懸命に自国民に「理解させ」るためによかれと彼は思ったのだが、「われわれドイツ人という人種の物質主義、食事や飲み物の嗜好、身体的な優しさの欠如、われわれの精彩のない現実的な愛情生活」をわれわれの流儀の自明な特徴として、フランス人に申し立てることができるということももはや驚くことではないだろう。そんなことを書く人間には、あなたはまだドイツで料理人とウェ이터とを区別することを学習していない、ドイツ人とドイツ人の成金の二者が別物だということがはっきりするまで、まだ20年は待つべきだったと、われわれは言うだろう。しかし、それにもかかわらずわれわれはこういう人の言い分を「理解する」だろう。そしてわれわれが正直であれば、われわれが奈落のようなものの縁にいて、現代のわれわれの教養ある世界の有用性が支配する雰囲気、前景をよりはっきり見るために、存在の背景をもはや照らし出さない、あの限定されるようになった文化意識、事物をその現実的な対象形式のかたちで、それだけ容易に生活の制御のために使うことができるようにと、事物を自分の内面の諸要素にこれ以上分解しないということ、——この状態全体が、必然的にその中から今日のわれわれの、この純然たる実業家世界、職業専門家世界を創り出したこと、そのエピキュリアン的な模倣をもそのなかから生み出したこと、そして、われわれの教養層の圏域の構成によって民族としてのドイツ人に、われわれが克服すべき成金の嫌らしい性格上の特徴を永続的な特徴として自ら顔の上に描きこむという危険に陥っていることをわれわれは感じとるであろう。

われわれはどうやってこの辱めを受けるような状況から抜け出るべきであろうか？ 言われたことの何かあるものが正しいのであれば、——教養層の新しい文化意識とわれわれが自身を見る新しい見方を通してということになる。確かに、このようなことは、講義の形で弁じられるものではない。そしてわれわれが必要としている新しい類型は、記述の類から生まれるものではないし、どこかの教授の論文から生まれることはもっともあり得ようがない。それは、感じとり、視覚でとらえ、体験されたものであってほしいと言っているのだ。しかし、他方で同

じく確かなのは、われわれがある種のことについてはっきり認識することなしには生まれないということである。その種のことから出発してはじめて、われわれは新しい自己観に達することができるし、それが新しいことをそもそも「体験」という可能性のためには、決定的なのである。19世紀の発展がわれわれをそこへと導いたような、際限ない内的な貧困化という意識化された感情抜きには、そうした貧困化から抜けだそうという強力な憧れなしには、われわれの文化の失われた要素やばらばらになった要素とそれ以外の新しい要素を再びわれわれのなかへ吸収し、それらを改めて本当にわれわれを形作ることの内的な要因とし、新しい共同体意識のなかに姿を見せる現実主義に基づいて、新しい中心点から新しい統合に持ち込むという自覚した意志無しには、この新しいものは生じることができない。一度一緒になれば、われわれはもうかなり先へ進むことになる。その先でわれわれに力を貸す人々が現れるだろう。しかし、それまでの間、われわれが——ラーヘル・ファルンハーゲン⁵⁶がかつて言ったように——自分の自己意識という畑に「絶望という肥料を与え」れば、もしそれが本物である限りは、事態が悪くなることはないだろう。

参考文献

《一次文献》

- Weber, Alfred (1921): Prinzipielles zur Kulturosoziologie (Gesellschaftsprozeß, Zivilisationsprozeß und Kulturbewegung). (文化社会学に関する原理的なもの(社会プロセス、文明プロセス、文化運動)) *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* Nr. 47, 1-49.
- Weber, Alfred (1951): Prinzipien der Geschichts- und Kulturosoziologie. S. 44-92. „SPEZIELLE BELEUCHTUNG DER PRINZIPIEN A. Gesellschaftsprozeß, Zivilisationsprozeß und Kulturbewegung“ Piper Verlag, München. = Alfred Weber-Gesamtausgabe Band 8. Schriften zur Kultur- und Geschichtssoziologie (1906-1958), S. 119-252. Metropolis Verlag, Marburg.
- Weber, Alfred (1911): Der produktive Geist. In: Alfred Weber-Gesamtausgabe Band 8. Schriften zur Kultur- und Geschichtssoziologie (1906-1958), S. 254-259. Metropolis Verlag, Marburg.
- Weber, Alfred (1912): Der soziologische Kulturbegriff. In: Alfred Weber-Gesamtausgabe Band 8. Schriften zur Kultur- und Geschichtssoziologie (1906-1958), S. 60-75. Metropolis Verlag, Marburg.
- Weber, Alfred (1923): Kulturosoziologie und Sinndeutung der Geschichte. In: Alfred Weber-Gesamtausgabe Band 8. Schriften zur Kultur- und Geschichtssoziologie (1906-1958), S. 76-82. Metropolis Verlag, Marburg.
- Weber, Alfred (1906): Theodor Mommsen. In: Alfred Weber-Gesamtausgabe Band 8. Schriften zur Kultur- und Geschichtssoziologie (1906-1958), S. 83-90. Metropolis Verlag, Marburg.
- Weber, Alfred (1909/1910): Der Kulturtypus und seine Wandlung. In: Alfred Weber-Gesamtausgabe Band 8. Schriften zur Kultur- und Geschichtssoziologie (1906-1958), S. 83-90. Metropolis Verlag, Marburg.
- Weber, Alfred (1934): Eubank-Interview. Ansichten über maßgebliche deutsche Soziologen. In: Alfred Weber-Gesamtausgabe Band 8. Schriften zur Kultur- und Geschichtssoziologie (1906-1958), S. 428-430. Metropolis Verlag, Marburg.

56 (訳註) ユダヤ系の貴族婦人(1771-1833)で、作家活動と並行してベルリンで著名なサロンの主催者となった。その客には、文学者、貴族、皇太子も含まれていたらしい。

《二次文献》

秋元律郎／曾良中清司（1968）『文化社会学』学文社。

秋元律郎（1976）『ドイツ社会学思想の形成と展開』早稲田大学出版部。

アルフレート・ヴェーバー（山本新／信太正三／草薙正夫共訳）（1958）『文化社会学』創文社。

柴野博子「アルフレート・ヴェーバー著『文化社会学としての文化史』翻訳研究——その1～その8——」『駒澤大学外国語部研究紀要』第8号165-182頁（1979）、同第9号65-79頁（1980）、同第10号55-80頁（1981）、同第11号161-197頁（1982）、同第18号293-311頁（1989）、『駒澤大学外国語部論集』第30号231-239頁（1989）、『駒澤大学外国語部研究紀要』第19（2）号165-206頁（1990）、同第32号49-70頁（1990）。

戸坂潤（1966）「文化社会学の批判」『戸坂潤全集第2巻』勁草書房、東京、S. 153-171。

三木清（1966）「文化社会学の批判」『三木清全集第3巻』勁草書房、東京、S. 153-171。

Demm, E.(2000a): Geist und Politik im 20. Jahrhundert. Peter Lang, Frankfurt am Main.

Demm, E.(hrsg.) (2000b): Alfred Weber zum Gedächtnis: Selbstzeugnisse und Erinnerungen von Zeitgenossen. Peter Lang, Frankfurt am Main.

Demm, E.(2003): Soziologie, Politik und Kultur. Von Alfred Weber zur Frankfurter Schule. Peter Lang, Frankfurt am Main.

Molt, Peter (2002): Alfred Weber heute. Ein wirklicher Lehrer und Meister *Politische Meinung* Nr. 387, 89-95. <http://www.kas.de/wf/de/33.540/>

Schluchter, W.(1994): „Max und Alfred-zwei ungleiche Brüder“. <http://www.uni-heidelberg.de/uni/presse/rc7/5.html>

（2009年7月22日最終原稿受理）

《Zusammenfassung》

Über Kulturosoziologie von Alfred Weber

Yutaka EGUCHI

Wissenschaftliche Beurteilungen des um vier Jahre jüngeren Bruders von Max Weber sind sehr unterschiedlich. Besonders scharf kritisieren die heutigen Soziologen seine kulturosoziologischen Werke des „praktizierenden“ Sozialwissenschaftlers und haben dessen akademische Spuren nach seinem Tod fast in die Vergessenheit geraten lassen. Trotzdem genießt Alfred Weber seit den 80er Jahren des letzten Jahrhunderts eine gewisse Renaissance. Als Früchte der akademischen Bemühungen von damals wurden schließlich sogar seine Gesamtwerke herausgegeben.

In Japan haben einige Philosophen und Soziologen vor und nach dem letzten Weltkrieg Alfred Weber als den Wegbereiter der Kulturosoziologie noch zu seinen Lebzeiten entdeckt und dementsprechend als einen wissenschaftlichen Betrachtungsgegenstand behandelt. In der Folgezeit fand man leider daran kaum einen wissenschaftlichen Anschluß mehr, wie es in Europa ebenso im allgemeinen der Fall war.

Zum einen, um Alfred Weber noch einmal im Zusammenhang mit der Wissenssoziologie zu lokalisieren, werden hier als Ausgangspunkt erneut seine Biographie und eine seiner frühesten kulturosoziologischen Überlegungen vorgestellt. Zum anderen sollte dies als ein Anfangsversuch dienen, den vielfältig aktiven Soziologen, der immerhin jahrzehntelang die geisteswissenschaftliche Welt in Deutschland ohne Zweifel mitprägte, erst richtig in Japan vorzustellen.